

福生市郷土資料室

# 芭蕉と奥の細道



素槩（藤森） 発句自画賛幅

①一幅（一一四・〇×二九・三）紙本墨 ②白河の関にて ③芭

蕉・曾良図。卯の花をかさしに関のはれ着哉 曾良。風流のはしめやお

くの田植うた 翁 ④翁及曾良奥羽行脚之写意 素槩 ⑤一顆

⑥外題、白川関 素槩画賛 名古屋井上士朗ノ門人 信濃人 藤森素槩

筆 通称 島屋 文政四年 六十四才没

素槩

野ざらし紀行

①「野ざらし紀行」(巻首題) ②(1)半(二二・三×一五・二種) (1)版(1)全一冊 (2)全一七丁 ③芭蕉著、月下編(跋) ④月下(跋)

⑤明和五年戊子四月、文台屋七兵衛板 ⑥貞享元甲子年 はせを(巻末)

野ざらし紀行(野ざらし) 俳諧紀行。芭蕉作。単行

本では月下本と波静本。前者、「野ざらし紀行」は、半一、月下編、自跋、明和五年刊、文台

屋七兵衛板。後者、「甲子吟行」は、半一、波

静編、自序、安永九年刊、花屋久治郎板。

【書名】初め草稿のまま伝わったためか、その書名も、「草枕」「芭蕉翁道之記」「野ざらしの

集」「野ざらし乃紀行(紀行)」「野ざらし紀行」「野晒紀行」「野曝紀行」、または「芭蕉翁甲子の

記行」「甲子吟行」「甲子紀行」等と記載されてきたが、次第に「野ざらし紀行」「甲子吟行」

に整理され、今では「野ざらし紀行」が優勢である。【成立】断片的には既に旅中に記録されていたであろうが、紀行文として纏められたのは貞享二年(1725)四月以降で、同三年六月までには

少なくとも、孤屋本型までには成稿か。以後、幾度かの推敲を経て波静本型の文体に定まる。

おくのほそ道 芭蕉著。元禄二年(1689)三月、芭蕉は曾良を伴い、江戸を出

発し、関東・奥羽・北陸の諸地方を歩いて八月末大垣に着き、更に伊勢への旅に赴いたが、この間の紀行文が本書である。芭蕉

自筆本がまだ世に出ない現在では、芭蕉が素龍に書きさせて自ら座右に所持していた素龍筆芭蕉所持本が本文として最も信頼すべきものである。(昭和二十三年、原屋退蔵解説で複製本が博文社から刊行)この本は芭蕉

の遺言によって去来に譲られたものであった。近年岡田利兵衛氏によって発見された素龍筆別本もある。昭和四十四年、コトタイフ版で新興社より刊行)また井筒屋本と呼ばれている板本は、元禄の末年右の素龍筆芭蕉

所持本によって京都の井筒屋庄兵衛が板行したものであるが、模刻の際の誤りが少しある。(昭和二十四年、杉浦正一郎校注、影印本として武蔵野書院より刊行)明和七年(1770)に蝶夢が上梓した本文も井筒屋本よ

っている。後刷本には他に刊年不明の白字副の『おくのほそ道』、文化十二年(1815)の『百家交筆おくの細道』(三津人編)、文政五年(1822)の『おくの細道』(交山・香雪圃)等がある。本紀行は漂泊の詩人の魂が俳文として見事に結晶されており、芭蕉の紀行中でも最も整った、最も優れた作品として定評がある。句と文との融合された俳文独得のスタイルがここに完成されたのである。

おくのほそ道 \*

①なし―見出し書名は内容による ②(1)半(二二・〇×一六・二種)

(1)写(転写) (1)全一冊 (2)全四一丁 ③「芭蕉著」 ④寛政八年

十二月十日 応門人夫山需秋香庵果兆書(奥書) 旭亭丈山(識語、後表

紙見返し) ⑦「秋香庵建部果兆」の略歴を記す紙片を添付

おくのほそ道

①「おくのほそ道」(巻首題) ②(1)大(二五・七×一七・六種) (1)版(1)全一冊 (2)全四三丁 ③宝晋斎永機首書、浪花 あしの丸家貞

英校合(見返し) ④元禄七年初夏 素龍、元禄十年冬 其角写 於

大坂旅店灯下校合畢(跋)、明治十七年冬 於其角堂枯蓮窓下 晋永機

(跋) ⑤其角堂蔵板(見返し)、明治十八年三月出版、出版人 晋永

機、発兌松崎半造

- ①「ひさし」 膳所(題簽) ②(1)半 (二二・五×一五・八種) (1)版
- (1)全一冊 (1)全一六丁 ③珍碩編(序) ④元禄三六月越智越人

(序) ⑤寺町二条上ル町 井筒屋庄兵衛板

ひさし

〔成立・刊行〕集中の連句はいずれも元禄三年(一六九〇)春から初夏の頃までに巻かれたもの。越人の序文は六月付であるから、その時までに編纂が完了したものとされる。阿誰軒の『俳諧書籍目録』によれば、刊行は同年八月十三日。板元は井筒屋庄兵衛。半紙本一冊。

〔内容〕「花見」と前書した芭蕉の「木のもとに汁も輪も桜かな」を発句とする芭蕉・珍碩・曲水の三吟歌仙一巻、珍碩の発句で芭蕉は脇句のみをつけ、第三から十八句目までは路通と珍碩の両吟の形をとり、十九句目以下は荷兮と越人の両吟の形をとった歌仙一巻と、さらに芭蕉の一座しない歌仙三巻を収める。

〔解説〕『おくのほそ道』の旅のあと、膳所で越年した芭蕉は、春しばらく故郷伊賀に帰ったが、三月にはまた湖南に来て、四月には幻住庵に入った。その間、芭蕉に親しむことの多かった湖南の門人たちは、『冬の日』『春の日』『曠野』を成した尾張の門人たちにならって、一書を編むことを思いついた。そして成ったのがこの『ひさし』である、歌仙五巻のみを収めているのは、いうまでもなく『冬の日』にならったものであるし、名古屋在住の越人に序を仰いだのも、先輩格の尾張俳壇に対する敬意であったのかもしれない。芭蕉の『おくのほそ道』行脚後の最初の関係撰集として、一新風が期待できるところである。

〔解説〕『おくのほそ道』の旅のあと、膳所で越年した芭蕉は、春しばらく故郷伊賀に帰ったが、三月にはまた湖南に来て、四月には幻住庵に入った。その間、芭蕉に親しむことの多かった湖南の門人たちは、『冬の日』『春の日』『曠野』を成した尾張の門人たちにならって、一書を編むことを思いついた。そして成ったのがこの『ひさし』である、歌仙五巻のみを収めているのは、いうまでもなく『冬の日』にならったものであるし、名古屋在住の越人に序を仰いだのも、先輩格の尾張俳壇に対する敬意であったのかもしれない。芭蕉の『おくのほそ道』行脚後の最初の関係撰集として、一新風が期待できるところである。

幻住庵記略註

- ①「幻住庵記略註」(巻首題)、「幻住庵記略註附猿蓑集跋文註」(外題)
- ②(1)半 (二四・七×一六・六種) (1)写(転写) (1)全一冊 (1)全三二丁
- ③黒樹園道旧著(巻首)
- ④此書黒樹園道旧の註解せられしを 果樹園菊雄筆を採りて校合し草稿として秘しをかれしを 護り受て蔵するものは聴月軒の主 伴鶴(識語) ⑥なし

幻住庵記

元禄三年四月六日から七月二十三日迄、近江石山の奥なる因分山の幻住庵に滞在した間の、生活と心境を記したものである。門人曲翠の伯父幻住老人の住み古した庵ではあるが、一旦は「やがて出でじ」とさえ思った程芭蕉の心にならうらしい。

この文は推敲の過程からほぼ三段階に考えられている。(一)『猿蓑』(元禄四年刊)所収のもので定稿とされるもの。大津村田家蔵真蹟もほぼ同文であるが、『猿蓑』所収のものの方が、更に推敲を経ていると思われる。許六編『風俗文選』(宝永三年刊)、蕙逸編『夏木立集』(弘化三年)の他、桃鏡、蝶夢、風徳等編の各芭蕉文集にも収録されている。

(二)初稿の形を伝えるものとして、杉某某編『芭蕉文考』(享和元年奥書写本「成城文芸」第三号で坂坂元氏紹介)があり、定稿と比べて大きな異同がある。定稿では句は「先たのむ椎の木も有夏木立」一句だが、この文では更に「頼て死ぬけしきも見えず蟬の声」の句があり、「元禄三夷則下 芭蕉桃青」の識語をもつ。これよりも更に草稿とみられる真蹟断簡が尾形伴氏(『言語と文芸』第六十

三考)によって紹介され、『芭蕉文考』稿以前にすでに草稿の執筆がなされていたことが推察され、同文との間には大きな異同がある。(三)再稿と思われるものに富山入善、米沢家蔵の支考旧蔵真蹟があり、文末に「此幻住庵ノ記は、先師芭蕉翁の筆跡也。世に幻住庵ノ記といふもの三通あり。初の草稿は洛の去来にあり。第二の草稿は此一巻也。第三は猿蓑集に出て世にされる所也。文章をの／＼ちがひめあり、後の人見合すべし」と支考が記入している。支考編『和漢文操』(享保十一年刊)所収の「幻住庵ノ賦」はこの米沢家本に依ったもの。また従来再稿かと考えられてきた大虫編『芭蕉翁真蹟拾遺』所収の「幻住庵記」は、米沢家本の次の三稿本との説があるが、芭蕉の手によるものでないとの否定説もある。その他、「先頼む」の句の詞書と見られる短文も数種ある。

俳諧炭俵集

①「炭俵」(序題)、「俳諧炭俵集」(巻首題)

②(イ)半 (二二・二×一

五・五種)

(ロ)版 (イ)全二巻合一冊 (ニ)全六〇丁 ③野坡・孤屋・利

牛編 ④元禄七の年夏閏さつき初三の日 素龍書(序)

⑤なし

⑥元禄七歳次甲戌六月廿八日(巻末)

俳諧炭俵集

①「俳諧炭俵集」(巻首題)、「すみたはら」(題簽)

②(イ)半 (二二・八

×一六・〇種) (ロ)版 (イ)全二巻二冊 (ニ)全六一丁(建三三丁、順三八

丁) ③野坡・孤屋・利牛編(巻末) ④元禄七の年夏閏さつき初

三の日素龍書(序)

⑤元禄七歳次甲戌六月廿八日、京寺町通 井筒

屋庄兵衛・江戸白銀丁 本屋藤助

炭俵

〔成立・刊行〕素龍の序によれば、孤屋

・野坡・利牛らが、霜凍る寒夜、芭蕉庵に

在って、芭蕉の詠じた「金屏の松の古さよ

冬籠」の句に感心して、撰集を思いついた

ものであるという。元禄六年(一六九三)冬

のことであろう。所収の連句はその年秋の

ものもあると思われる。序文は元禄七年閏

五月三日付で、刊記によれば、元禄七年六

月二十八日刊。半紙本二冊。題簽は上巻下

巻ともに「すみたはら」。

〔内容〕上巻に、歌仙三巻と百韻一卷、

さらに春と夏の発句百五十五句を季節別に

収めている。最初の歌仙は芭蕉の「むめが

よりのつと日の出る山路かな」を発句とする

芭蕉・野坡の両吟。三番目の孤屋の発句

による歌仙にも芭蕉は一座している。上巻

の他の二巻の連句には芭蕉は一座していな

い。発句の部には、芭蕉の句として、「蓬

菜に聞はや伊勢の初便」「傘に押わけみた

る柳かな」「卯の花やくらき柳の及こし」

「うぐひすや竹の子藪に老を鳴」など、十

句を収める。ただし、芭蕉の名であげられ

ている「川中の根木によろこぶすゝみ哉」

は、出羽の岸本公羽の作を翁と誤ったもの

であるというから、芭蕉の句は実際は九句

である。下巻ははじめに秋と冬の百一句を

季節別に収める。芭蕉の句として「朝鏡や

昼は鏡おろす門の垣」「鞍壺に小坊主乗る

や大根引」「寒菊や粉蝶のかゝる白の端」

など五句を収める。ただし「こころでも、芭蕉

名による「冬枯の磯に今朝みるとさか説」

が実は岸本公羽の作であるというので、実

際は芭蕉の句は四句である。さらに下巻に

は、歌仙四巻がある。ただし、最初の歌仙

は、三十二句までで未滿。芭蕉が一座する

のは、三巻目と四巻目で、三巻目は芭蕉の

「振売の雁あはれ也あびす講」の発句には

じまる。

〔解説〕芭蕉晩年の風調「かるみ」をよ

くあらわすものとして重要である。『猿蓑』

で至高の俳諧美に到達した芭蕉は、獲得し

た芸術性が次の段階で一つの束縛となるこ

とを嫌い、さらりとした平淡な風調を導入

しようとしてとめた。芭蕉の一座した連句の

なかでも、とくに「梅が香」の巻、「空豆

の花」の巻などによって、芭蕉最晩年の淡

白にして高雅な芸術境を知ることができる。

野坡・孤屋・利牛の共撰によるが、芭蕉庵

において、芭蕉の「炭だはらは非也けり」

という独語ときつかけとして撰集が発議さ

れたことでもあきらかなように、よく芭蕉

の意図を具現した集である。初板の板木が

用いられ、原本のおもかげをよく残してい

ると思われものによる影印本として、近

世文学史研究の会編『炭俵』(文化書房

昭和43年刊)がある。

猿蓑集

- ①「猿蓑集」(巻首題) ②(1)半(二二・五×一五・七種) (1)版 (1)全六巻合一冊 (2)全五九丁 ③去来・凡兆編(序) ④晋其角(序)、元禄四稔辛未仲夏 風狂野柄 丈草漢書 正竹書之(跋) ⑤京寺町二条上ル丁 井筒屋庄兵衛板

猿蓑集

- ①「猿蓑集」(巻首題)、「猿蓑」(上册題簽)、「さるみの」(下册題簽) ②(1)半(二二・五×一六・〇種) (1)版 (1)全六巻二冊(乾一、四巻、坤五・六巻) (2)全五九丁(乾三五丁、坤二四丁) ③去来・凡兆編(序) ④晋其角(序)、元禄四稔辛未仲夏 風狂野柄 丈草漢書 正竹書之(跋) ⑤京寺町二条上ル丁 井筒屋庄兵衛板

猿蓑

〔成立・刊行〕其角の手になる序文は雲竹書によつて「元禄辛未歳五月下弦」と記され、文章跋文中には「元禄四稔辛未仲夏」の語があるので、元禄四年(一六九二)五月に成つたものであることはあきらかである。「下弦」は「下流」の意か。五月下旬というわけである。ただし、集中の連句「市中は」の巻は元禄三年六月頃の興行、「灰汁桶の」の巻は同八月下旬か九月頃の興行、「鶯の羽も」の巻も同年冬のもの、「梅若菜」の巻は元禄四年正月の作である。また集中の俳文「幻住庵記」は、元禄三年八月頃の稿と考えられる。刊行は阿誰軒『俳諧書籍目録』によつて、元禄四年七月

三日であつたことがわかる。井筒屋庄兵衛板。半紙本二冊。再板本には、其角序の末尾の年月と、「雲竹書」の文字とを欠いてゐる。

〔内容〕乾・坤の二冊より成り、乾には「巻之一」から「巻之四」まで、坤には「巻之五」と「巻之六」を収める。はじめに其角の序をかかげ、巻之一には冬の発句九十四句、巻之二には夏の発句九十四句、巻之三には秋の発句七十六句、巻之四には春の発句百十八句を収め、その作者は計百八名にのぼる。入集句の多い順でいへば、凡兆の四十一句、芭蕉の四十句、去来・其角の各二十五句などである。芭蕉の句は、「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」「こがらしや頬腫痛む人の顔」「住つかぬ旅のこゝろや

置火燵」その他。巻之五は、芭蕉一座の歌仙四巻。巻之六は芭蕉「幻住庵記」と去来の兄震軒によるその後文を収め、さらに幻住庵訪問の客の発句三十五句を「凡右日記」としてまとめ、最後に丈草の跋文を添える。連句のはじめの一卷は去来の発句により、次の二巻はともに凡兆の発句によるが、最後の二巻は芭蕉の「梅若菜」よりこの宿の「ろ汁」を発句とする。

〔解説〕蕉門が文学的に最も充実した時期の撰集で、蕉風を代表する書であり、俳諧史上の聖典ともいふべきものであつた。『野ざらし紀行』『冬の日』の風狂の精神がしだいに沈滞したものとなり、『おくのほそ道』の自己監視と「ひさこ」の新境地を経て、ここに一つの円熟を見たのである。境地の上ではさらに『放浪』に「かるみ」の展開が見られるわけであるが、蕉風の詩の理念は、ここですでに頂点に達した。許六が『宇陀法師』で、「俳諧の古今集也。初心の人、去来が猿蓑より当流に入るべし」といひ、支考が『発願文』で「猿蓑集に至りて全く花実を備ふ。是を俳諧の古今集ともいふべし」と述べているのも、もつともなことである。発句は必ずしも佳句のみとはいきれないが、おおむね高雅幽寂の趣を有し、特に連句のはじめの三巻は、蕉風句付けの最高傑作とされるものである。編纂には作風において対照的ともいえる去来・凡兆の二名が当り、芭蕉の懇切な後見があつた。影印本に杉浦正一郎編『新註猿蓑』(武蔵野書院、昭和26年)前田利治解説『猿蓑』(勉誠社、昭和50年)がある。

置火燵」その他。巻之五は、芭蕉一座の歌仙四巻。巻之六は芭蕉「幻住庵記」と去来の兄震軒によるその後文を収め、さらに幻住庵訪問の客の発句三十五句を「凡右日記」としてまとめ、最後に丈草の跋文を添える。連句のはじめの一卷は去来の発句により、次の二巻はともに凡兆の発句によるが、最後の二巻は芭蕉の「梅若菜」よりこの宿の「ろ汁」を発句とする。

統猿養集

- ①「統猿養集」(巻首題)、「統猿養」(上巻題)、「統猿養の」(下巻題)
- ②(1)半(二二・八×一六・一)種 (1)版 (1)全二巻二冊 (1)全六五丁(上一七丁、下四八丁)
- ③「沾圃他編」(綿)による
- ④なし
- ⑤元禄十一寅五月吉日 めつゝ屋庄兵衛

統猿養

〔成立・刊行〕元禄六、七年(一六九三、四)頃の作品を主として収めている。支考によれば、江戸の沾圃が予撰し、それを芭蕉が、元禄七年の夏に、伊賀の東麓庵で支考とともに検討して完成したものであるという。刊行は芭蕉没後の元禄十一年五月。

〔後猿養〕「猿養後集」ともいわれた。井筒屋庄兵衛板。半紙本二冊。

〔内容〕上下二巻より成る。上巻に歌仙五巻と「今宵賦」と題する支考の俳文を収める。俳文は第四の歌仙と第五の歌仙の間に置かれている。第二の歌仙以外の四巻には芭蕉が一座する。ただし第三の歌仙では芭蕉は三句目に一句出しているだけである。芭蕉の発句によるものは、第一と第五の歌仙のみ。その発句は、「八九間空で雨降る柳かな」と「夏の夜や崩れて明し冷し物」。下巻には発句五百十九句を、四季・釈教・旅之部に分類して収める。作者二百九名。

うち芭蕉は三十一句。支考は二十四句。沾圃は二十句である。芭蕉の句は、「顔に似ぬほつ句も出よはつ桜」「春もやゝ気色とふのふ月と梅」「鶯や柳のうしろ敷のまへ」等。

〔解説〕

板本の奥書には撰者不明となっているが、支考によれば「前かけの返事」中の記事、前記のように、沾圃・支考・芭蕉の共撰ということになる。元禄七年九月十日、去来宛芭蕉書簡によっても、芭蕉が支考相手に編纂の仕事をおこなったのは確かである。ただし、古来この書を支考による偽撰であると説があり、七部集から除外すべきであるとの意見さえある。偽撰とするのは当らないまでも、芭蕉没後四年もたつての板行であるだけに、支考による改竄があつたのではないかとの疑いはある。この書が「前猿養の実をほどこき、炭俵集の虚をおぎなへば」(前かけの返事)とするのは支考流の表現であるが、芭蕉晩年の風調「かるみ」をよくあらわすものであることはたしかなことであつて、七部集最後の一案とすることも不都合なことではない。

- 芝山(白川) 発句自画賛幅
- ①一幅(二〇四・〇×二九・〇)種 紙本墨
- ②芭蕉行脚図。初しくれさるも小養をほしけなり
- ③文政壬午(五)の時雨月応需謹て像す
- 芝山 ④一額、東山外春
- ⑤外題、白川芝山芭蕉行脚図

蕪安 半紙本・一冊 李由・許六編 元禄十一年(一六九八)刊

改題の序によると、本書は当時の俳諧の点者が格式に暗く、俳道の日々に衰えてゆくのを愁えて編集したものという。まず主要な季題について、蕉門の句を例にとつてその格式の解説をし、諸家の発句を類集する。ついで「発句調練の弁」に発句の案じ方を論じ、諸家発句・六番相撲合を掲げ、最後に李由の「四霖廬賦」、許六の「飲食色欲箴」の二文を載せる。俳論を表に立て、その間に諸家の句を配しているのは、

へんつき

- ①「へんつき」(巻首題)
- ②(1)半(二二・八×一六・八)種 (1)版 (1)全一冊 (1)全四七丁
- ③李由・許六編(巻首)
- ④于時元禄戊寅(一一)秋九月、近陽城武林 松氏汝郵字師姜於藝蓼齋叙(序)
- ⑤元禄戊寅(一一)秋九月、井つゝや庄兵衛板

撰集形式としては新しい試みである。またその所論は、蕉門の季題観の資料として注目される。連歌以来の故実を重視すると同時に、新味追求を生命とする俳諧独自の本意論を展開する鋭い見解も、また高く評価されよう。所論は、去来と取り交わした『俳諧問答青根が峰』と相亘る点が多く、去来は本書を駁して『旅寝論』を草した。なお本書の題号は、漢字の偏を伏せ秀を示して、その字を当てさせる中古の文字遊戯の名で、李由・許六編の『韻塞』に対したものである。『俳書大系 蕉門俳話文集』等に収録。

芭蕉(元禄六年 十一月八日付 怒誰宛

簡▽一

①一幅(二五・〇×六〇・〇種)

②完

③御修行つりのり行申候哉

(下略)

④はせを 霜月八日 怒誰雅丈

⑤『連歌俳諧研究』一

四号参照

膳所の酒堂が大坂へ移住し、地元の之道と確執を起しかけていたらしいことを推測させる文面が注目される。表装のため前文を失ったらしく、虫損・摩擦による欠字がある。

「御修行つりのり行申候哉。聊間断におゐて□馬の蠅に驚、逍遙無何有の郷を失ルものならん。」

酒堂より頃日書狀指越候。返翰具に申遣し候。何事をも相心得候と申越候は、貴邊よりなど聊被仰遣候事も候にて、存知之外胸裏分別を重寶仕ると相見え候。よし〜これも悪からず、千歳此方の人、爰に繫縛せられ生涯是非の溝洫に□溺候へば、彼鉢の若もの、いまだころばぬをかちと被存候。連衆もそろ〜出来申由、珍重に存候。

一、つらりつと御心得奉頼候。中にも正秀・林甫いかゞ被致候哉。久ミ左右も不承候。乍去此方御合力には御狀被下まじき由奉頼候。此度狀数少と御座候間、重而□可ニ申上候。以上

霜月八日

はせを

怒誰雅丈

一 俳諧の修行に益々精進なさつていすか。一書簡一三七。  
二 たえま。間を置くこと後輩の上達に驚き先を越されるの意。「馬の蠅に驚」は「驛尾に付す」による表現。三「莊子」逍遙遊篇中の「無何有之郷」(無為自然の境地)による。四 書簡一三〇にも同様の文がある。  
五 何事も心得ているといつて来たのは、あなたから注意してやっただけでしようの意。一補注六。六 案外心中では分別を大切に思っているように見えます。七 他人の批判を受け入れて自分の非をさとること。  
八 せまい自分の分別。九 何事にも是非の区別を立てるというみぞ(狭い思慮)に溺れてきたので。下の「ころばぬをかち」は失敗をしないのは感心だの意。この前後の文は、この秋畫かれた「閑閑之説」に相通するものがある。右の文参照。  
一〇 酒堂が大坂移住後、門人を得つつあったことを指す。丈草

「仲秋既月雜記」(藤の笑)に八月大坂の酒堂を尋ねた折のことを「浪花の幽居を敷くに、主大にうなづき悦び集る門下の人々を携へ」とあり、發立・龜脚・史庭・桃英・志用などの名が見える。二 膳所の首領へよろしくの意。三 水田氏。膳所の商家。四 膳所藩士か。酒堂の叔父。一四 たより。  
一五 私に金銭の御援助を下さるためなら、御手紙を下さらないようお頼み申し上げます。  
一六 膳所藩士。曲水の弟。

五元集

- ①「五元集」(巻首題) ②(ハ)大(二七・三×一八・二種) (ハ)版 (ハ)全四巻四冊 (ハ)全一八四丁 (元四六丁、亨四四丁、利二六丁、貞五八丁)
- ③其角遺稿、百万坊旨原編(序) ④百万坊旨原(序) 其角(序)
- ⑤江都書肆 日本橋通二丁目 前川大左衛門梓 ⑥皆延享四丁卯年秋八月全編校合成、百万旨原(巻末)

元禄 枯尾華

- ①「元禄枯尾華 上」・「明枯尾華 下」(題簽) ②(ハ)半(二二・三×一・五二種) (ハ)版 (ハ)全二巻二冊 (ハ)全八四丁(上四九丁、下三五丁)
- ③晋永機編(刊記) ④明治廿六年初冬 団窓梅逸(跋) ⑤明治二十六年十一月日発行、編輯人 東京 晋永機、発行兼印刷人 同江澤松五郎

枯尾華 半紙本二冊 其角編 元禄七年刊

芭蕉の歿後直ちに其角が編んだ追悼句集であるが、上巻の巻頭に収める「芭蕉翁終焉記」は其角の筆に成り、芭蕉終焉の有様だけでなく生前の行状が簡潔に記されており、支考の『友日記』、路通の『芭蕉翁行状記』と共に、芭蕉の伝記資料として重要である。特に天和三年(本書では貞享元年となる)の甲斐流寓、仏頂に参禅の記事、死因を「有ふれし函の塊積にさけるやと覚えしかど」としていること、芭蕉の遺骸を養仲寺に運んだときの供の中に「寿貞が子次郎兵衛」とあげているのが注目される。

『俳諧文庫第一冊芭蕉全集』・勝峯晋風編 『其角全集』『俳諧大系 蕉門俳諧全集』『日本名著全集 芭蕉全集』に収録。

俳諧七部集

- ①「俳諧七部集」(題簽) ②(ハ)小(一四・三×一〇・五種) (ハ)版 (ハ)合二巻一冊 (ハ)全一九二丁(上一〇四丁、下八八丁)
- ③精衛道人編(序) ④庚子(天保一一)の首春精衛道人誌(序) ⑤天保十五年辰ノ孟春、増補校合中村屋源八・日本橋通二丁目 三河屋甚助

俳諧七部集の成立 半十二。佐久間柳居編か。「成立」書誌「享保十七年頃成か。芭蕉一代の撰集中、主要なもの七部十三冊、すなわち「冬の日」(貞享三)・「春の日」(貞享三)・「廣野」(元禄七)・「ひき」(元禄三)・「猿蓑」(元禄七)・「猿蓑」(元禄十)を集めたもので、古来蕉風の經典のように思われてきたものである。七部の撰定者については、諸説があるが、去來や許六・支考などによって注目されて来た芭蕉の代表的撰集を、享保期に至って佐久間柳居が右の七部に定めたものと見るのが妥当である。最初の刊行年月は明らかではないが、元文頃と推定される井筒屋庄兵衛・橋屋治兵衛連名の「俳諧書籍目録」に、七部の書名・値段・刊年・撰者名・冊数を列挙し、「右七部集翁立門人撰」とあり、交阿(柳居)編「高軒」(享保十)に「爰に年比我愛せる杖あり、いはゆる冬の日・春の日・ひき・あら野・炭俵及び前後の猿蓑、此七部の書合せて十二冊、その中をぬきん出て読時も……」とあるから、享保十六、七年頃、すでに板行されたものと推定される(寛政七年版、半の原原本と)。その後、安永三年(享和子周)によって小本二冊に仕立てられて流布したが、七部の順序に異向がある。その他の諸本に、安永板後刷・寛政板後刷と思われるもの、「豆本(後巻)七部集」

天保十一年刊「一校正七部集」(弘化二年刊)・「校正七部集」(天保四年刊)・「正改新刻七部集」(文久三年刊)・「標註七部集」(元治元年刊、小などがある。「選定の意義」諸説「七部撰定については二つの目的が考えられる。一つは、芭蕉一代の撰集から代表的なものを選び、蕉風俳諧の修行の範とするためと、今一つは、芭蕉一代の作風の変遷を示さんためとである。後にこの七部撰定について異議がさしはさまれたのは、風調の推移、すなわち交風を示す目的の立場からの見解である。しかし、それにもかかわらず、なお蕉門の經典の如く信じられ流行したのは、これを芭蕉一代の代表撰集と考え、俳諧修行の範としたからである。蕉風の開眼と交風を示す代表撰集については、芭蕉歿後論議があつたらしく、去來は「次韻」に発生し、「猿蓑」「冬の日」「猿蓑」「炭俵」と発展したと説き、許六は「桃青門弟独吟二十歌仙」にはじまると説いた。後世においては表水は「猿蓑」に、曲寄は「江戸阿吟集」に、その発生をおいているが、純蕉風の変遷を示すという点からは「冬の日」にその起点をおくことが、最も妥当なこととして一般に認められて来ている。



①「韻塞集」(巻首題)、「俳諧韻塞集」(外題) ②(イ)半(二二・一×一六・八種) (ロ)写(版本写) (ハ)全二巻二冊 (ニ)全六七丁(上三〇丁、下三七丁) — 筆写者が上・下巻を誤認しているが、当該本の巻分けのままにした ③李由・許六編(各巻末) ④元禄九丙子冬臘月買年李由(序)、蒲菊坊僧千那書(跋)、于肯元禄九年丙子冬臘月日於風狂堂選之(奥書)、此韻塞集全部巻者、統七部集之其一部也、海如先生之蔵ヲ伝テ写ス者也、文化十三丙子晚秋柳實庵 良志(筆写者奥書)

韻塞 俳諧撰集。半二。李由・許六共編。李由序。千那跋。許六奥。元禄九年完成、同年刊。井筒屋庄兵衛板。題号は中古の文学上の遊戯の名に基く。上巻は李由の編。芭蕉の百年の気色を庭の落葉哉を巻頭に、諸家発句を十月から九月までの十二月に配し、追加として閏月を付す。発句数五百三十四。下巻は許六の五老并記を冒頭に、元禄

五年十月、芭蕉・許六・酒堂ら一座歌仙以下八歌仙、李由の榎馬伝、芭蕉の許六差別詞(樂門辞)・同鏡別詞句、許六の甲路記行・同風狂人が旅の賦等を収める。許六の処女撰集で、元禄五年における芭蕉との交會を記念する句文を中心に、体裁・内容ともに出色の成果を収めている。「俳書大系」「名著全集」所収。(風形)

俳諧十論

①「俳諧十論」(巻首題) ②(イ)大(二七・二×一八・七種) (ロ)版(ハ)全三巻三冊 (ニ)全八三丁(上三八丁、中三〇丁、終一五丁) ③東華坊(支考)編(序) ④東華坊(序)、享保己亥之歳(四)林鐘晦日 獅子房蓮二(十論ノ讚) ⑤京寺町抑小路 橋屋 野田治兵衛

俳諧十論 大本二冊 支考著 享保四年刊 支考は享保四年(一七)に俳論書『俳諧十論』を刊行し、その中で芭蕉伝にふれ、「壯年に仕官をしりぞぎ、洛の季吟に俳諧をまなびて」とあるように、致仕の時期と、

季吟師事について述べている。後者は、直門伝記では初見。またつづけて、「埋木は書本にて朱点を加へたる物二冊あり。其伝は寛文の中比ならん」と述べて、『埋木』伝授の事を伝えている。支考はさらに享保十年(一七)の「十論為

去来抄

①「去来抄」(巻首題) ②(イ)半(二四・〇×一六・五種) (ロ)写(版本写) (ハ)全一冊 (ニ)全六二丁 ③去来著(序) ④安永三甲午年十月 晁台(序)、井土郎(跋)、嘉永三庚戌とし暮秋 草亭主人(筆写者奥書)

去来抄 半紙本・三冊 去来著 安永四年(一七七五)刊

芭蕉及びその門下の人々の俳論・俳諧を集成したもので、著者が篤実な去来であるだけ、土芳の『三冊子』と共に、蕉風俳論の根本資料として最も重要視されている。「先師評」「同門評」「修行教」の三部に分かれ、第一部は蕉門の人々の句に対する芭蕉の評、第二部は芭蕉ならびに蕉門の人々の句に対する同門の評を主とし、第三部は蕉風俳諧の修業上の教訓を収めている。従来写本として伝わり、またその中の一部が諸書に載せられただけであったが、安永四年、晁台

が初めてこれを上梓した。板本として紹介されたものは以上三部だが、上梓されなかったものに「故実篇」がある。この板本の板下を清書した一首の『寂葉』には、本書を四冊といい、板本以前の古写本も多く四部から成っているのが板行の際何らかの事情で省いたのであろう。「故実篇」は、去来と、卯七或いは魯町らとの蕉風の法式に関する問答を収めている。本書の稿は元禄十五年(一七〇二)ごろから宝永元年(一七〇四)に亘って成ったものと思われる。『俳書大系 蕉門俳話文集』『日本名著全集 芭蕉全集』『岩波文庫 去来抄・三冊子・旅寝論』等に収録。

弁抄)でも「伊賀素生」の項に芭蕉伝を収めている。ここではまず、「雅名は金作」と幼名を伝え、「十九のとしに官をしりぞきて洛陽の季吟を師とし」とくり返して、致仕と季吟師事について述べている。致仕を「十九のとし」としたことは、先の「壯年に」と自己撞着をきたしている。現在、致仕は輝吟の没年寛文六年で二十三歳のときと明らかになっているのだから、どちらにしる

誤りであろう。さらに深川芭蕉庵入庵について、「武江の深草の芭蕉庵に隠遁ありしは、三十六のとし也」と明示しているが、実際は延宝八年の三十七歳のときであるから、これも信頼がおけない。『俳書大系 蕉門俳話文集』『俳諧文庫第八編支考全集』『俳諧文庫第十五編統俳諧論集』に収録。

甫旧（橙庵）・西馬（惺庵） 発句画賛幅

①一幅（九五・〇×三三・六種）絹本墨 ③④⑤芭蕉翁図、惺庵西馬

拝写（二顆、蕉林吟場）。百とせのけしきを庭の落葉かな 橙庵甫旧謹

書（二顆、太平之印） ⑥外題、祖翁正像 西馬の書 名古屋而后方

より来る 別紙在り。西馬、安政五年没

泊船集

①「泊船集」（巻首題） ②（ハ）半（二四・七×一七・〇糎）（ロ）写（版

本写）（ハ）全六巻二冊（上冊一〜三巻、下冊四〜六巻）（ニ）全九〇丁

（上四二丁、下四八丁） ③風国編（序） ④かつしかの隠子 素

堂（序）、元禄十一寅年初秋 風国謹識（序）、文化十三丙子仲夏写 柳

賢庵良志（筆写者奥書、上巻末、右泊船集六巻ハ洛陽風国之集処成ヲ

晋如子ヨリ伝リ海如齊主写ス、又予乞テ写ス者也 文化十三年丙子林鐘

柳賢庵（筆写者奥書、下巻末）

泊船集 半紙本・三冊 風国編 元禄十一

年（一六九八）刊

芭蕉の遺稿遺詠を編纂した最初の書で、

題号は芭蕉の別号泊船堂よりつけた。全六

巻。巻一に「芭蕉翁道乃記」と題して『野

さらし紀行』を収め、巻二から巻五までは、

各巻に「芭蕉翁拾遺稿」と題し、芭蕉の四

季発句五二一句を一巻に一季ずつ収め、巻

六は追加として芭蕉以下蕉門諸家の発句二

四一句を四季類題として載せる。校訂に精

確さを欠くとはいえず貞享以後の作品をほぼ

収め、初出句二四を数えることは、芭蕉句

集の嚆矢としてその功を認めるべきである。

『俳諧叢書第七冊芭蕉翁全集』に収録。本

書の補正を試みたものに、許六の『校正泊

船集』一冊（山崎喜好著「芭蕉と門人」参照）

がある。

芭蕉翁句解

①「芭蕉翁句解」（巻首題）、「芭蕉句解」（題簽） ②（ハ）半（二二・五

×一五・七糎）（ロ）版（ハ）全二巻二冊（ニ）全六二丁（春夏二九丁・秋冬

三三丁） ③雪中庵蓼太著（巻首） ④楚水（序） ⑤江戸書林

前川六左衛門・大坂書林 塩屋忠兵衛、心さい橋筋北久太郎町南入 塩

屋忠兵衛（下巻末蔵版目録） ⑥なし ⑦宝曆九年版か（綿）に

よる

芭蕉翁絵詞伝

①「芭蕉翁絵詞伝」（題簽・柱題） ②（ハ）大（二七・八×一九・四糎）

（ロ）版（ハ）全一冊（ニ）全八六丁 ③蝶夢著（跋） ④寛政四年子の冬

十月十二日 蝶夢幻阿弥陀仏謹書 寛政五年癸丑歳四月 湖南菊二井口

保孝心需書（跋） ⑤蕉門俳諧書林 井筒屋庄兵衛・橋屋治兵衛

芭蕉翁絵詞伝 本三冊 蝶夢著 寛政五年刊

芭蕉の百回忌（寛政四年）に、蝶夢が芭

蕉の伝記をまとめ、狩野正栄の絵を挿入し

て、絵巻物として、養仲寺芭蕉堂に奉納し

たものを、翌年その原図を田代武に縮写さ

せて刊行したもの。出仕の時期を「明暦の

ころ」といい、「雲とへだつ」の吟を寛文

六年伊賀出奔の折とする以外、異説・新説

はないが、要領よくまとめられた伝記であ

り、絵も面白い。幸田露伴校訂『富山房百

科文庫36』『日本名著全集 芭蕉全集』『俳

諧叢書第七冊芭蕉翁全集』に収録。

芭蕉門古人真蹟

- ①「芭蕉門古人真蹟」(題簽)
- ②(大)二七・八×一九・一(種)
- ③依今編(序)
- ④筑前の国飯塚のうまやなる依今発起す(序)、天明二年寅十月時雨會於義仲寺芭蕉堂前、蝶夢幻阿弥陀仏謹誌(跋)
- ⑤寛政元年己酉春發行、粟津義仲寺藏、皇都書林 井筒屋庄兵衛・橋屋治兵衛・同儀兵衛

のける月恋の巻に依り



北越雪譜 大本七冊 牧之編 天保七年刊  
 前編三冊には雪に關した記事、後編四冊には多く北越の奇談珍談の如きものを集める。二編二之巻に「芭蕉翁が遺墨」「はせをの容貌」の二項目がある。致仕後上落して季吟入門、「書を北向雲竹に学ぶ」との新説も出ている。『岩波文庫』に収録。

○ 芭蕉翁が遺墨

およそ越後の雪をよみたる歌あまたあれども越雪を目前してよみたるはまれなり。西行が山家集、頼阿が草庵集にも越後の雪の歌なし、此韻僧たちも越地の雪はしらざるべし。俊賴朝臣に「降雪に谷のゆりづもれて、梢ぞ冬の山路なりける」これらは実に越後の雪の真景なれども此あそん越後にきたり玉ひしにはあらず、俗にいふ歌人は居ながら名所をしるなり。伊達政宗卿の御歌に「さゝずとも誰かは越ん関の戸も降りづめたる雪の夕暮」又「なかくにつらりをりなる道絶て雪に隣のちかき山里」此君は御名たかき歌仙にておはしまししゆゑ、かゝるめでたき御歌もありて人の口碑にもつたふ。雪の実境をよみ玉ひしはろしめす御ノ国も深雪なればなり。芭蕉翁が奥に行脚のかへるさ越後に入り、新瀉にて「海に降る雨や恋しき身宿」寺泊にて「荒海や佐渡に横たふ天の川」これ夏秋の遊杖にて越後の雪を見ざる事必せり。されば近來も越地に遊ぶ文人墨客あまたあれど、秋のすゑにいたれば雪をおそれて故郷へ逃帰るゆゑ、越雪の詩歌もなく紀行もなし。稀には他国の人越後に雪中するも文雅なきは筆にのこす事なし。吾が国三条の人眞嶺山人北越奇談を出板せしが文化八年版 六巻輸入本 一辞半言も雪の事をしるさず。今文運盛にして新板湧がごとくなれども日本第一の大雪山なる越後の雪を記したる書なし。ゆゑに吾が不学をも忘れて越雪の奇状奇蹟を記して後來に示し、且越地に係りし事は姑く載て好事の話柄とす。さて元禄の頃高田の御城下に細井昌庵といひし医師ありけり。一に青庵といひ、俳諧を善して号を凍雲といへり。ひとよせはせを翁奥羽あんぎやのかへり、凍雲をたづねて「葉欄にいづれの花を草枕」と発句しければ、凍雲とりあへず「萩のすだれを巻あぐる月」此時のはせをが肉筆二枚ありて、一枚は書損と覺しく淡墨をもつて一抹の痕あり。二枚ともに昌庵主の家にたつたへしを、後に本書は同所の親族三崎屋吉兵衛の家にたつたへ、書損のは同所五智如来の寺にのこれり。しかるに文政のころ此地の 邦君風雅をこのみ玉ひしゆゑ、かの二枚持主より奉りければ、吉兵衛へ常信の三幅対に白銀五枚、かの寺へもあつき賜ありて今二枚ともに 御蔵となりぬと友人葵亭翁がものがたりしつ。葵亭翁は蒲原郡加茂明神の修験宮本院名は養方吐簡と号し、又無方斎と別号す、隠居して葵亭といふ。和漢の博識北越の聞人なり。芭蕉が件の句ものに見えざればしるせり。百樹曰、芭蕉居士は寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の藩に生る。改男寛文六年歳廿四にして仕紳を辭し、京にいいで、季吟翁の門に入り、書を北向雲竹に学ぶ。はじめ宗房といへり。季吟翁の句集のものにも宗房とあり。延宝のすゑ、はじめて江戸に來り、杉風が家に寄、小田原町 藤屋 藤左エ門剃髮して素宣といへり。素宣は後の名なり。芭蕉とは草庵に芭蕉を植しゆゑ人よりよびたる名の

芭蕉翁米櫃瓢四幅

- ① 一幅（一一・二・五×二六・二種）摺物 ② 芭蕉翁米櫃。柏庭所持、五粒三伝へ、今又三外二伝。壬辰六月下旬、懇望シテ一見写之 ③ 四山 一瓢重泰山 自笑拈箕山 莫習首陽山 道中飯頼山 ④ 葛飾隠士素堂書 ⑤ 箱に以下の伝来書等を添える

- 一、四山瓢伝来証書
- 二、四山証、鳳朗筆
- 三、四山瓢記、松平四山筆
- 四、箱書染筆打合せ書簡
- 五、四山瓢之賛、詠婦筆
- 六、四山瓢入手記念摺物、鳳朗序
- 七、芭蕉真蹟雪丸げ一軸証記・添翰、鳳朗筆。付談状、若人筆
- 八、幻住庵扁額談文、鳳朗筆。付幻住庵扁額筆者考証、山川正宣筆

四山の瓢

芭蕉庵の瓢の命名を山口素堂に依頼して、四山の銘を得たので、これに興じて作った文。夏目成美著『随齋語話』（文政二年刊）に、「瓢之銘 山素堂 一瓢重泰山、自笑拈箕山、莫習首陽山、道中飯頼山」の銘を本文の前に記して所収され、へものひとつ瓢はかるき我よかなの句を付している。眉山・孤洲共編の『四山集』（元禄十六年刊）や、『葉集』にも収録されている。また『太編』七柏集（天明元年刊）にも載るがこれは発句を欠く上異同が多い。

四山 俳人。出雲母里藩主、松平志摩守直興。初号、知足。別号、閑花林・一鏡・孤円斎・東幻庵。安政元年（一八五四）七月二十四日没、五十五歳。江戸に住。鳳朗門。芭蕉が米入れにしたという瓢を得て、四山・瓢界と号す。狩野風の画、嵯峨様の書をもよくした。  
 参考 高木蒼梧「お大名俳人雑俎」〔石楠〕昭28・216。

一、四山瓢伝来証書

・天保五年（一八三四）十月十七日  
 ・差出人 本屋平八（俳名、一葉）  
 ・受取人 野村源三郎  
 「右伝来は大久保今助所持之处、同人没後  
 妄露と申者、浪花屋正助へ相頼二付・  
 求置候处、此度・以双龍軒直吉殿、乍  
 恐閑花林尊君様へ奉献上度間、何分貴所  
 様より宜敷御披露奉願上候」

二、四山証

・十月十一日（天保五年力）  
 「四山瓢  
 真物粉無御座候  
 鳳朗」

三、四山瓢記

・天保六年（一八三五）十二月  
 「形状  
 寸法  
 証書 鳳朗  
 箱書付 市川白猿  
 右者蕉翁米櫃俳優柏猿への遺物にして代々三升伝来なり故あって当家之珍藏とす  
 閑花林（松平四山）記」

四、箱書染筆打合せ書簡

・十二月十日夜

「瓢三升拜見仕候処相違無之品・則御箱書付即刻仕候と申筆ヲ取候処木場より只今出産有之・甚取込二相成候間御箱蓋預ケ置罷帰リ私儀持参仕候処・明後十二日・出来・」

五、四山瓢之贊

・天保六年春

「むかしはせ越の翁の一つの瓢を・四山と号・名物の瓢・其行衛たしかならず・今年今月いつちよりか・あらはれいて・松平侯の御手に入・新玉のとし立かへる瓢かな 詠掃」

六、四山瓢入手記念摺物、鳳朗序

「甲午のとし神在月てふはじめに一瓢を得たりそれ祖翁の米櫃にして正風唯一の大器なり不思議に予が手に入る事俳道の面目なりと幸ひに名を四山とあらため蕉家独立の俳諧禪をいとなみ彼瓢中に隠れて片手の声をつがむ・冬こもりいてや瓢は推はしら 四山

(以下、表十句)

七、芭蕉真蹟雪丸げ一軸証記・添翰、鳳朗筆

付讀状、若人筆

・癸月六日

・差出人 鳳朗

・受取人 一器、一狐

「口演

・其節被仰付候一幅一紙認上申候・奥書之方宝之字重文仕候是は認直可差上処自然二宝を重候は都而愛度表にてやはり其儘圖をうち差上候是又宜被仰上可被下候様奉願候」

・子四月

・差出人 若人

・受取人 鳳朗

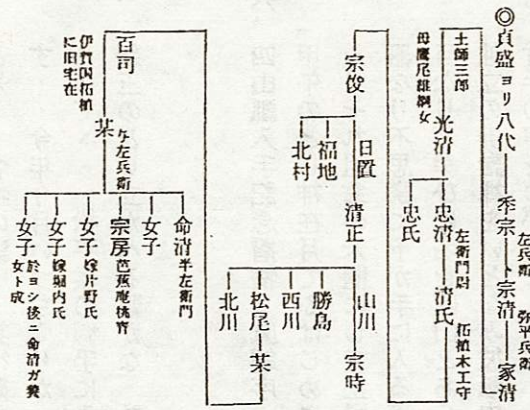
「覚

・右式品御望之方江御讓被下候為御挨拶右之通御渡被下候受取申候以上」

雪まるげ

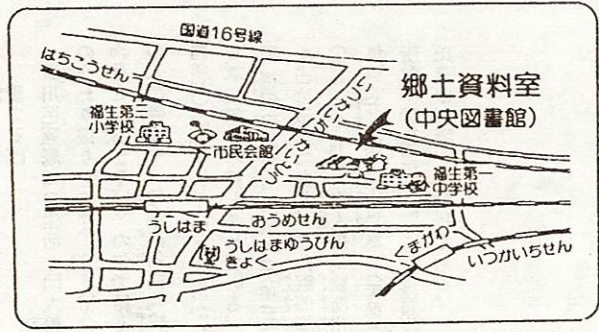
深川芭蕉庵での生活と門人曾良との断金の交わり振りを描き、へきみ火をたけよき物見せん雪まるげの句で結んだ文。曾良の入門時期や、句が其角編『枕邊栗』(貞享四年刊)に初出している事情から、この文は貞享三年冬の稿とされている。曾良遺稿・周徳編の『雪滿呂気』(天明三年刊)の巻頭を占める文であり、また眠郎編『雪の薄』(安永六年刊)、梅人編『統深川集』、『一葉集』、若人編『花贈集』(天保五年刊)等に所収。『花贈集』には当時信州諏訪久保島氏蔵の真蹟を模刻してある。

松尾家系略図 (竹人『芭蕉翁全伝』)



参考・引用文献

- ・「森田文庫資料目録」福生市教育委員会
- ・萩原恭男校注「芭蕉書簡集」岩波書店
- ・小宮豊隆、他監修「俳諧大辞典」  
明治書院
- ・中村俊定監修「芭蕉事典」春秋社
- ・松尾靖秋編集「俳句事典(近世)」  
桜楓社



福生市熊川11850番地-1  
☎ 0425 (53) 3111